

日本食品衛生協会移転記念 ASCON のつどい
能登半島地震復興支援！

～消費者と事業者の連携を考える～

開催報告 2024年4月

【開催】

2024年4月16日(火)17:00～19:30

食品衛生センター6階講堂にて 参加:32名

【講演】

株式会社ぶった農産代表取締役会長 佛田 利弘氏



【講演の概要】

(1) 能登半島地震の復興と次代へのいざない

- ・地震が少ないという過信と思い込みがあり、安心だと企業誘致をしてきた。
- ・しかし、実際には1729年「能登・佐渡地震 M6」、1892年「能登地震」、1933年「七生湾地震」、1985年・1993年「能登半島沖地震」、…と、大地震が頻発していた。
- ・能登地域は輪島市、珠洲市、志賀町など4市・5町。23年10月の合計人口は約16万 6,000 人で、10年前に比較すると17%減少。地震による避難は 4 万人を超え、金沢へ転出した子どもたちの周辺に移住する人が増えている。
- ・半島の過疎問題はかねてより地域に深刻な影響を与えていたが、この一瞬の出来事で全壊・半壊・準半壊の人々は加賀や県外に二次避難。一人くらしの高齢者も多く、住宅の解体と復旧には 10 年かかる。そうすると、常勤の産婦人科医もおらず、若い世代が住むには厳しい状況だったが、戻る人もかなり少なくなる。
- ・〈農業〉条件不利な中山間地であったため多くの農業者は離農してきている。農業法人も後継者がいないことや度重なる地震による負債もあり、廃業方向。かつては葉タバコの大産地であったが、「禁煙」でほとんどの葉タバコ農家は廃業。
- ・〈林業・水産〉今回の地震で約4メートル隆起。山は土砂崩れし、多くの林道が使えず、伐採・運び出し、植林にも影響。
- ・港は船が出せない状況、漁業は温暖化などの影響で漁獲高が激減。
- ・〈地域産業〉日本酒の製造はもとより、日本四大杜氏の能登杜氏を多く輩出している地域。奥能登 11 歳のうち 10 歳が全壊等の被害。加賀の蔵が酒造りを支援している。「輪島塗」は多くの工房が被害にあい職人は避難している人が多い。
- ・〈避難所〉1月2日・3日は水(800リットル)を積んで志賀町の避難所へ支援に。志賀原発の避難サイトになっているため、内圧をかけた状態で換気が悪く、カーテンも鉛入り。炊事用具は一切ない。原発は使用済み核燃料を冷やすための電源の変圧器の損傷でバックアップ 1 系統のみの危機的状況に。
- ・〈上下水道〉下水道の話はほとんどニュースにならない。上水が来なくてもトイレで水を流すと破断してしまう。公共下水と農村集落排水の施設を使った汚泥の減容を行うことを考えたらよい。

佛田さんコメント

未だ復興には遠く、復旧の見通しすらついていない。工事現場の職員は狭いワゴン車の中で寝泊まりするか、時間をかけて通勤する人も少なくない。復興計画も専門家と言われる人たちが国や県の中で作成されているようで、市民参加や合意形成のプロセスを組み込んでいないという指摘もある。

しかし、能登の人々の民意民度こそが、復興の源泉であり、能登の風土、土着、自然、環境などの『持続美』の価値に基づくものではないかと思う。

「能登はやさしや土までも」(江戸時代の加賀藩士・浅加久敬の言葉)

—— 能登の風土、土着、自然、環境などの『持続美』こそが価値である。

(2) 農業の抱えている課題と消費者への開放

- ・問題を農業内部で抱えていて消費者に開放していないのではないか。共有し、議論していないのではないか。心理的安全性を確保できる市民と市民社会。ある意味、人間関係の安心と安全。
- ・食品の安全安心 ①安全であり安心だと思う ②安全であるが不安を感じる ③危険であるが安心と考える ④危険であり不安を感じる
- ・「樹脂(プラスチック)皮膜肥料」は、全水稻面積の約6割で使用されている。(150万ヘクタール×60% = 約100万ヘクタール・1ヘクタールに20本~50本分のペットボトル)
- ・化学物質の国内基準と国際基準に違いがある。または他国の基準。
- ・再生産可能な価格形成が必要。一方、農業者団体は農産物を買取らない委託販売方式が残っている。
- ・案外、水田はリン酸過剰。鶏糞や牛糞には、多用するとリン酸過剰に。亜鉛、鉄、マグネシウムなどの欠乏症状を誘発することが挙げられる。
- ・コメには、品種と産地品種銘柄がある。新潟コシヒカリのほとんどは、コシヒカリBL1号~6号、9号~13号という品種を登録生産している。従来福井で育成されたコシヒカリではない。
- ・でしが都市計画法で市街化調整区域となっている地域では分家住宅がたてにくく、都市近郊でも限界集落になっているところが多い。

(3) 市民社会との“郷働”に向けて **住民なくして地域なし!**

- ・「共同」・「協働」から「郷働(さとはたらき)」に。
- ・ *Wellbeing Farmland* 現在約500万人の農地地主が存在。市民が関心を持って農地を注視することは日本農業の国益となる。
- ・ “*There is no date in nature*” 自然界に日付はありません。

(4) その他~株式会社ぶった農産の発足(明治16年)からの経営や取組みについてお話しいただいた。



4.13 ぶった農産の圃場 ↑

4.27 コープ農園での「田植え」→
子どもたちも参加!

※写真は、フェイスブックより拝借

【参加者の意見感想】

★私が一番伺いたかったこととしては①能登半島地震の復興と次代へのいざないでした。

佛田様に被災地の現状を語り部のように話していただいたことにより、より一層生々しい現実を感じることができました。

過疎の加速、農業のできない田畑、奥能登の酒蔵は一蔵しか残っていないことなど、身に染みて伝わってきました。復興は地域住民を巻き込まないと進まないのに、巻き込む住民がいない現状では復興は進まない理由と伺いました。

しかし、救われたのは「能登の優しさ」であり、本来持つ土地、人、農作物があるのだから、気力を徐々に蓄えていければ急がずともきっと復興の兆しが見えてくるのではないかと応援しています。

★①能登半島地震の復興と次代へのいざない

相当の被害の様子から、どのように復興し次代に繋いでいくのか心配されるが、佛田さんは、地域の環境や条件も踏まえた郷土愛と先進性で進んで行かれるものと確信しました。誤解を恐れず言えば、能登地震の対応では、行政の力量の格差を感じます。国は何をか言わんや、もっとやるべき事はあるはずです。

②農業の抱えている課題と消費者への開放

農業の抱える課題は深く広範だと今更ながら知りました。樹脂皮膜肥料については全く知らず、関心をもちました。今後に注視していきたいと思います。

③市民社会との“郷働”に向けて

生協では「生産者と消費者」は理解し合うためにかねてより意識的に交流を重ねて来た歴史があります。郷働が新しい繋がりを作ることを期待したいです。

◎全体に沢山の資料からお話いただいたので理解不足もありますが、あらたな視点を提示頂いたと思います。代々農業に向き合い、経営的、政策的視点からのアプローチで進めて来られた手腕は素晴らしいと思いました。

★能登の状況や農業者としての課題を参加者に共有していただく貴重な機会をいただき感謝申し上げます。

能登半島に繰り返し地震が起きていたこと、特に2020年のM7.6の地震以降に耐震基準が強化された後に起きた今回の地震で、生活や産業(農業・観光業)に大きな被害を出し、未だ避難生活を続けている地域もあることが佛田様から直接伺えたことによって深く理解できたと思います。

また、業界で主流の肥料には樹脂被膜があり、使用することで日常的に多量のペットボトル容器を撒いている換算値を聞いて、環境にやさしい農業生産が進んでいるだろうと浅い考えが覆りました。知らないということはこうも罪深いことなのだと感じます。農業の現場に足を運んで理解を深めたく、できれば北陸の状況も目で確認したいと考えております。考える機会と課題を共有いただけたこと有難く、改めて御礼申し上げます。(交流時間に、常時備えることの重要性を教えてくださいました。外出時に携帯バッテリーを必ず持とうと思います！)

★大変インパクトのある「集い」でした。有難うございます。3つのテーマ、それぞれに感ずることがありましたが②の樹脂被覆肥料については正直ショックでした！状況を更に知りたく、Net検索してみましたところ既にNHKが特集していることがわかり、自分の感度の鈍さにまたショック！一方で、業界団体の対応の鈍さ、また、農業関係の研究所から報告された論文(マイクロプラスチックの発生源の12位で、それも他の農業資材で使用するプラスチックと合算しての順位なので大きな問題ではない)には呆れました。12位だからではなく、その絶対値の大きさに目を向け、早急に改善の手を打つことが重要なのに---。農業保護政策より国民の健康、更に地球規模での改善への取組みが急務です。

★つどいでは、お世話になりました。お話に加え食べ物なども素晴らしかったです。

佛田さんのお話を聞いて消費者として何ができるか、私なりに言葉にしてみました。

能登半島地震の復興については、ありふれたことにはなりますが、消費者としては、能登半島の産品購入等を通じて応援することが、身近にできることではと感じました。先日、物産フェアが開催されてい

ましたので、私も輪島塗などを購入いたしました。少しずつの貢献を積み重ねながら、能登復興への関心を持ち続けることが大切だと感じました。

また、農業の抱えている課題を消費者と共有するという点については、そのことが農業関係者から喜ばれないこともあると思いますが、全員が消費者(市民)という視点に立ってどのような行動が相応しいのか考えていくことが大切だと感じました。その際、消費者としては、エシカル消費とでも言うのでしょうか、生産物がどんなプロセスで生産されたものを消費することが社会全体にとって良いのか、また、そのプロセスをどのように明示するような仕組み(〇〇を使用しておりません等の表示)が必要か考えていく必要があると思いました。消費者としては、購買行為を通じて意思表示をするという大切な権利を意識していく重要性を感じました。

「郷働」の考え方については、共感するものがありました。私たちは昔に比べ個別化(核家族化)してきており、改めて新たな繋がりの方を模索していく必要があると思っています。昔のような隣組、集落、街といった地理的に固定化された繋がりだけではなく、その課題に貢献できる人が役柄などによらず集まって(繋がって)、それを解決していく(あるいは新たなアイデアを作っていく)ようなネットワーク的な繋がりをもつ社会をイメージしてみました。

★小職は、東日本大震災で津波被害のあったスーパーマーケット加工現場の消毒初期化サポート業務に携わった経緯から、今回の震災復興の状況に興味がありました。

特に被災状況と能登の隆起した経緯と、台湾や他の地域で発生した震災と比較して遅いように思われる復興の原因についておよびぶった農産物の樹脂被覆肥料についての解説がタイムリーでとても参考になりました。今後の海洋プラスチック拡散防止に貴重な知見だと思います。

能登のお酒も楽しませていただきました。 感謝

★佛田様からの能登の農業者のお立場からの生の声、心にしみました。

地震だけではなく、今後の気候変動に伴う豪雨水害等の気象災害の増加も想定されている中で、特に都市部以外の地域における社会的な備えをどのように作り上げるかは、日本全体としての課題だと感じました。市民社会の視点からはどのように強くしなやかな(レジリエントな)コミュニティをあらかじめ作るのかという論点があるように思います。

佛田様からの「避難所で行政に頼らないリーダーシップ」のお話とも関連するかと思いますが、その際には地域社会の様々な(国籍や性別、障害をお持ちの方など)人たちを積極的に包摂することが必要だと感じました。

企業の立場からは、そのような地域のコミュニティに対して雇用や経済の面で関与すること、そして実際に災害が起こってしまった際の情報やモノの支援のネットワークを確保することが必要だと感じます。

★①能登半島地震の復興と次代へのいざない

現在の能登半島の抱える問題が、リアルに良く理解できた。

報道も、次第に少なくなっており、現地に近い方からの、説明は貴重だと感じた。

②農業の抱えている課題と消費者への開放

以前からの関心事であり、興味深く聞かせていただいた。農薬や肥料の問題は、環境、人体への安全性の問題と不可分で、生産性を高めることとの利益相反があるため、情報開示もされにくく、このような場で、興味深く伺った。一方で、科学的な根拠があるのかについては、若干の疑問も持たせていただきました。

③市民社会との“郷働”に向けて

市民活動を活発化させていくことが、重要だというのは、自身のテーマでもあり、興味深く伺いました。

◎会合全般について

運営側の皆様のご尽力で、このような会が行われていることに、敬意を申し上げます。

参加者の方々もそれぞれ、思いがあつてご参加されておられましたので、初めてではありましたが、とても有意義でした。参加費が少ないにも関わらず、日本酒や、食べ物も豊富で、参加されている方々の、社会

活動の一環で行われているのだと思いますが、次回は何か貢献できることがないかなと考えさせられました。

★話をお伺いし能登半島における様々な課題を知る事ができました。

- ・人口減少や過疎の問題
- ・県の7年分ものゴミの問題
- ・医療の問題
- ・家屋の修復の問題
- ・地域産業の問題など

これからも手厚い支援が必要である事を痛感いたしました。

また、今回初めて知りましたが樹脂被覆肥料のプラスチック問題。前職がニッスイでしたので、海洋プラスチック問題は会社でも取り組んでおりました。ただ、今回の対象となりましたプラスチックの海への流入と言うのはあまり取り上げられていません。今回は海洋流入の具体的な量が示されておりませんでしたので、海洋プラスチック問題にどれだけインパクトを与えるのかは不明でした。ただ、農業にプラスチックが使われてそれが海に流出するということを知りましたので、今後どの程度のリスクなのかを検討する事が必要と考えました。

コメント(まとめて代えて)

元旦に発生した能登半島地震は、私たちに大きな衝撃を与えました。家の下敷きになっている人や津波に襲われた人は助けられているのだろうか、子どもたちは家族と一緒にいるのか、避難所に水や食料をどうやって届けるのか、避難所でつらい目にあっていないかなど、心配で、心配で、報道から目が離せない毎日が続きました。近い地域に住んでいる友人にも連絡して情報をもらい、関係する市民団体にもできる支援をお願いしてきましたが、以前からの友人だった佛田さんは被災地に近い野々市市で農業法人を営まれており、1月2日から被災地支援の活動を始められ、被災地の状況をフェイスブックなどで発信し続けてくれました。

そしてこのたび「ASCON のつどい」で、状況をより詳細にお話くださり、復旧と復興には、「人間関係の安心と安全」が重要であり、後世に美しい地域を残すためには、市民「協働」のまちから、郷土の持続に一步踏み込んだ持続的な「郷働(さとほたらき)」のまちへの変容が期待されると述べられました。

4月3日には台湾東部で大きな地震が起こり、現在も継続して起こっていますが、地域の人々の助けあいのネットワークや行政の動きも素早く、活発で、日本とは大きく違っています。佛田さんのお話を聞いて、日本においてはこれまでの激甚災害における教訓が十分に活かされておらず、備えも不十分であることを痛感しました。

さらに、農業の抱えている深刻な課題についても言及され、特に水田にまかれている「樹脂(プラスチック)皮膜肥料」がマイクロプラスチックによる海洋汚染の大きな要因になっていることは、参加者に衝撃を与えました。化学物質についての情報などとともに、あまりにも消費者に伝えられていないことが多く、消費者と農業者との連携を阻む壁になっていることも共有することができました。

講演後は、佛田さんに差し入れていただいた能登の日本酒やお菓子を味わいながら、さらに意見交換したり、楽しく充実した懇親会になりました。佛田さま、皆さま、本当にありがとうございました。

※キリンビールさま、そして個人会員の河野さまからも飲料やお漬物の差し入れをいただきました。

佛田氏から差し入れていただいた「能登の酒」を
みんなで堪能しました！！

能登の人と自然が育んだやさしく、
美味しいお酒でした！
「持続美」ってこういうことを言うのですね！！

2024年4月

阿南 久

